

2016年4月27日

対談企画

石川康宏 教授  
×  
兵庫民医連若手職員

GO VOTE!

選挙へ行こう



無 関 心

でいられても、

無 関 係

ではいけない

政 治

と 社 会

のこと。



選挙権年齢が18歳に引き下げられる参議院選挙を前に、これまで以上に若い世代の動きが注目を集めています。4月27日、石川康宏教授と、研修での学習を終えた新入職員3名を含む若手職員5名が政治や社会の問題について自由に話し合いました。



#### 座談会参加者 左から

- ①藤野紗千さん 東神戸病院・看護師（新入職員）
- ②神原健斗さん 潮江診療所・事務（新入職員）
- ③北島季弥さん 尼崎医療生協病院・事務（新入職員）
- ④石川康宏さん 神戸女学院大学文学部総合文化学科教授  
憲法が輝く兵庫県政をつくる会代表幹事
- ⑤橋本銀河さん 神戸協同病院・事務（県連青年J B実行委員）
- ⑥長浜 悠さん 東神戸薬局・薬剤師（東神戸病院で研修中）

——最初に自己紹介をお願いします。安保法制や憲法の問題など、いろんなことを研修で学んだと思いますが、疑問やよく分からない点も率直に意見を出しながら、先生とお話しただければと思います。

## 原発反対の活動に取り組んで

橋本 神戸協同病院で医療事務をしている、橋本銀河です。入社してから12年経ちます。石川先生の本は、職場の人と朝の5分か10分ぐらいの時間を使って『マルクスのかじり方』を読み終えて、今は『社会のしくみのかじり方』を読んでいます。私は毎週金曜日に関電の神戸支店前で原発反対の行動をしています。福島事故があり、本当に原発は大丈夫なのかなという不安を持ちました。事故のあと原発が全部止まり、それでも1年以上電気が足りていた事実があるのに、なんで再稼働させようとしているのかと強く疑問に思っています。いま、熊本の震災があって危険な状況の中でも、川内原



発は動き続けているので、そういう問題について今日は話したいと思っています。

## 命の格差を開かせない



長浜 神戸医薬研究所で薬剤師をしている、長浜悠です。今年でちょうど4年目になります。去年、戦争法案の動きがあり、それから反対活動を続けています。なぜかと言えば、患者さんの状態がよく見える医療従事者という立場だからだと思うんです。患者さんに「もうちょっと安いお薬ないの」と言われたり、処方箋が2枚あるはずなのに1枚しか持ってきてくれないことがあったり、いろんな事情を持つ方に接する中で、本当は平等であるべき命が不平等に扱われている実態に直面します。民医連は特にそういう状況が見えやすい現場だと思います。

戦争法によって、たとえ今すぐに戦争が起ころなかったとしても、命の格差が開いてしまう可能性があります。

ますよね。実際に、戦時中はとくに医薬品などの数も限られるなか、立場の弱い人たちはどんどん見捨てられてしまったという過去があります。平和というのは、命を尊重することと切り離せないものだと思う。

## 自分の意見を持って 投票へ行きたい

北島 新入職員として尼崎医療生協病院で外来医事課に配属されました、北島季弥です。平成7年3月生まれの21歳です。選挙権を得てからまだ選挙に行ったことがなくて、今後の選挙にはぜひ自分の意見をもって投票に行きたいと思っています。



## 無言でいることは、いまの政治を 肯定しているのと変わらない



神原 尼崎医療生協の潮江診療所で事務をしている、神原健斗です。僕も大学に通っていた頃は、なんとなく選挙に行くという意識でした。投票へ行かない人が多いですが、研修

の中で、無言でいるということは今の安倍政権を肯定することを意味しているのだと知って、それじゃいけない、これは問題だと思うようになりました。安倍政権がどんどん戦争ができる国づくりを進めようとしている中で、なんとか若者が今の政治の現状を知り、自分たちで戦争をしない国にしなければいけないと思っています。

## 投票へ行ってみて分かったこと、 もっと学びを深めたい

藤野 東神戸病院でこの4月から看護師として働いている、藤野紗千です。20歳になったばかりの頃は、選挙というのはただ一票を投じるだけのことだと思っていました。でも、実際に投票へ行ってみて、それは違うと気づきました。自分の思いを叶えてくれる候補者は誰なのか、誰だったら私が住んでいる市や国を託していいのだろう



か。いろいろなことを考えて投票しなければいけないということ、まず学びました。それに加えて、就職してからいろんな患者さんを見るうちに、医療人の目線からも政治について考えなければならぬと思いました。法律は犯したら罰せられるのに、政治家が憲法に違反しても何も起こらないのはなぜだろうとか、たくさん疑問があります。これからも、自分なりに学びを深めていけたらと思っています。

## 無関心ではいられても、 無関係ではられない



石川 関連する大学での話題といえば、18歳選挙権です。入学した時から全員が有権者なので、「この国がどうあるべきかについて責任を負うのは、昨日まで高校生だった君も同

じだよ」という話をしなければならぬ。授業の中で伝えているのは、「無関心ではいられても、無関係ではられない」ということです。無関心でいるという、本人の気持ちは自由かもしれない。でも、例えば消費税が上がったら、自分が払う税金は増える。TPPが成立すると医療は悪くなっていく。自衛隊とどこかの軍隊が戦争したら、われわれは敵国の国民にされてしまう。「無関心は一見ラクかもしれないけども、結局、無関係ではられないから、政治や社会の中身はある程度ちゃんと知っておかないといけない」という話を、今は1年生にもするようにしています。大きな話題は、戦争法や原発についての話ですね。

## 就職するのは何のため？

石川 入職されたばかりの方もおられますね。うちの学生も就職活動をしますから、就職するということはどういうことかという話もしています。だいたい3本柱で話を進めるのですが、1つは生活すること。自分の給料で食べていくということです。もう1つは、仕事を通じて社会のどこかを支えるということ。ちゃんと支えているから、社会的な評価があって給料ももらえる。例えば、大学へ通うのに学生たちは阪急電車をよく使っています。駅では朝早くから人が働いていて、ホームを掃除して、自販機の裏側に釣り銭を入れて、夜中にレールの点検をしてくれる人もいます。たくさんの人たちが力を合わせることによって、



1日何百万人も人間が時間通りに移動して、学校や会社、病院へも行ける。電車の到着が遅れば文句を言うのが当たり前だと思えずにいる学生たちに、

「あの人たちは、ものすごく社会の中で役に立っている。君たちは社会のどこで役に立つつもりだ」という迫り方をしています。

みなさんにも、医療の分野で働くことは社会の中でどういう役割を担うことなのかとぜひ考えてほしい。

3つ目は、職場は成長する場所だということです。学生の中には、人間が成長するのは若いときだけだと勝手に思い込んでいる人も多い。けれども実際は、そこから先どんどん伸びていくものです。ですから、伸びていく方向、自分はこの分野を担っていくためにどういう能力を身につける必要があるのかということ意識しながら仕事をして欲しいと思います。与えられた仕事をこなすだけでなく、自分がこの分野で果たせる役割をどうやって大きくしていこうかなと考えてもらいたい。それは本人にとっても、社会にとっても大事なことではないかと思う。

## 社会のなかで役に立つということ

石川 社会のなかで役立つ方法はいくつもあります。仕事を通じて役立つことができれば、それでお金がもらえて、生活も落ち着いて、なおかつ世の中に喜ばれるのだから最高だと思う。しかし、多くの人は民間の企業に勤めています。お金を儲けることが会社という組織の最終目的ですから、労働条件が悪かったり、「こんなものを売っていいのか」と思うような商品を売らなければならないということも残念ながらある。そういう人が、自分も社会の役に立ちたいと思ったらどうするか。その場合には、仕事以外に行動を起こせばいい。例えば毎週金曜日に関西電力前で抗議活動を行うというのは、別にそれで給料がもらえるからやっているわけではない。「大人として、子どもたちに責任を持つ」という立場を自覚して、よりよい社会のために自分はどういう役割が果たせるのだろう、ということを考えてやっているわけです。10年後、20年後に自分の子どもから「日本が戦争を始めたとき、お父さんは何をしていたの？」と聞かれて、「そのときは甘く見ていて、何もしてなかったんだ」と答える人間になるのか。それとも、「そんな社会を若い人に残すことはできないと思って、一生懸命にがんばったよ」と言える人間になるのか。そこでがんばることは社会のなかで役に立つことの大事な筋道の1つだと思います。

## 「おせっかい」は世の中を変える!?

橋本 働くということの意味を考えたとき、民医連の職場は働きがいがあるところだと感じます。目の前の患者さんを良くするために、どう寄り添うべきかということをおもひで考えて医療・介護ができて、差額ベッド代のお金がどうこうか気にしなくていいというのは、すごいことなんじゃないかと思っています。私が原発反対の行動に参加するのも、やりがいがあるから。民医連で働く人は基本的にみんな「おせっかい」だと思います。目の前の人に対して、もっと何かできないか常に考えているところが魅力なんです。それだけじゃない。いま自分にできることについて考えた結果、デモに参加したりとかもう一步踏み出して行動できている。そういうところが民医連のおもしろさの1つだと思っているので、いろいろ参加して欲しいと思います。

神原 「おせっかい」と言っただけなんです、グイグイいく感じは今でも実感しています。困っている患者さんの不安をみじんも残さないと言わんばかりに働きかける。患者さんが安心して生活できるように、という思いが伝わります。僕も同じように患者さんに寄り添って、安心して生活していけるようにサポートができたらいいなと思っています。

藤野 私たちが社会保障の制度も含めて、広く世の中のことを知っていないとできないことですね。民医連というのは、一人の人を見るということでも、いくら生活を変えても仕方がないよね、だったら世の中を変えてしまおうかという力があると思う。

## 成長できる職場で

石川 社会のなかで医療機関はどうあるべきか、医療機関としてもう一回り大きな役割をはたすために、政治に対してどうかわるべきかなど、いろいろ考えるきっかけが嫌でも与えられる職場でしょ(笑)。そういうことを自分なりに考えて、人として成長していく先輩がたくさんいるという点で恵まれた職場だと思いますね。

大事なものは、お金を儲けることが目的なのか、それとも市民に医療を提供することが目的なのかという根本の部分です。TPPIは、医療を儲けるための場所にし

ようという話です。日本中の多くの医療関係者がTPPに反対しているように、医療というのは本来、金と引き替えに行うべきものではない。なんでもかんでも金と引き替えにするのは資本主義社会のよくないところ。そういう思いを組織として持っているというのは立派ですね。

## 自分の意見を持つのはむずかしい？

**北島** 今の世の中、なかなか自分の意見を出す人が少ないと思います。選挙にいかない人が多いというのも、そういうことかなと思うのですが…。

**橋本** まわりの友だちと政治の話はなかなかしないですよ。

**北島** しないですね。引っ込み思案が多いなというイメージです。

**神原** 民医連ではこの間、安保法制反対を掲げて様々な企画が持ち上がったたり、尼崎医療生協ではアスベスト裁判の傍聴にみんなで参加するという機会もありました。こうした働きかけはいろいろあるので、もっと周知されたら参加してもらえるんじゃないかなと思うのですが。

**橋本** 最初の一步というのはなかなか難しいですね。民医連は毎年原水爆禁止世界大会に参加しているし、アスベストの裁判もそうですが、実際に行って直接その人たちの声を聞くと、全然違うと思う。難しそうだなとか、政治の勉強をしてないからと一歩引いてしまって集まりにくいのかなという感じはします。もっと気軽にみんな来たらいいのにとは思いますけど。

**藤野** 自信があったら行くと思うのです。わたしのこの意見って大丈夫なんかなあ、言っているのかな、そう思うのは自分だけなのかなあって自信が持てなくて、できないんだと思う。たとえば政治や選挙に興味を持ったとしても、「社会人として未熟で、まだ何も知らないからそんなふうに見えるのよ」と言われたら、参加できないと思います。誰だって、否定されるのは怖いからです。

## 「自信のなさ」の正体は？

**石川** 若いというだけで否定するのは、すごく乱暴な判断の仕方だと思いますね。僕は59歳で、大学に入学したのは40年ぐらい前のことです。もとは北海道の札幌で暮らしていたんですが、京都の立命館大学に入りました。当時、立命館は私学では全国で一番学費が安くて、年間11万円払えば通えたんです。バイトで月に1万円貯めさえすれば、自分で学費を払うことができました。だから貧乏なやつがいっぱいた。新入生歓迎の時期には、山ほどビラを渡されました。そこでびっくりしたのは、部活やサークルの売店にまじって政党の売店もあったことです。小さな机の上にそれぞれが新聞をドンと載せて、そこにいかつい顔した先輩が2人ぐらい座っている。政治を語りあうのは当たり前だという環境でした。大学へ通ううちに20歳になって有権者になる、その時に政治のことは分かりませんと言っていたら話にならないだろうと。1年生のときにたまたまやった自治委員の集まりで「今日はクラスでこれを議論してもらいたい」と言い渡されたテーマは「ベトナム戦争の終結について」でした。僕の入学は1975年4月で、ベトナム戦争が終わった瞬間だからホットな話題ではあった。でも札幌で暮らしていたときに、ベトナム戦争について考えたことなど一度もありませんでした。それでも考える訓練をさせられる、大学はそういう空間でした。

そんな中で、私学助成の拡充を求める運動に巻き込まれました。国立大学の数が少ないから私立大学がいっぱいつくられた。高等教育を国民に保障するのが国の役割なのだから、私立大学の経営を支えるための助成金をもっとしっかり出せという運動です。1年生の6月頃には夜行バスで国会まで行って、全国から集まった大学生と共に、国会議員に「今、われわれは学ぶためにこういう大変なバイトの状況なんだ」という話をする機会がありました。

君はこれをどう考えるのか、こういう現実をなぜ知らないのか、と問われる空気が大学にはあった。それが数十年がかりで壊され、学生たちにも継承する力が十分になく、だから政治の話題を若いときに浴びることがないし、友だち同士で夜を徹して話し合うという経験もあまりなくなった。それが政治問題を考えるときの自信のなさにつながっている。たぶん個人や個性の問題ではなく、社会全体が若い人たちの育ちづらい、政治的教養を身に付けにくい状況になってしまった。計画的にそうさせてきた人たちがいるのでしょ。

## 時代を切り拓いているのは、若い人

石川 そんな状況のなかで驚かされたのが、3.11のあと原発ゼロの運動に若い人たちがいっせいに立ち上がったということと、そして安保法制・戦争法案反対に、日本中からあれだけ若い人たちが立ち上がったことです。この大学にも、「わたし、SEALDsです」と公然と活動している学生がいます。

若い人たちが、前に出て、社会のあるべき姿について語り始めている。それはすごい転換だと思います。

宣伝カーの上で、「神戸女学院大学〇〇です。私は戦争法に反対します！」ってスピーチを終える。見事だと思いました。「これは他の誰でもない、私の考えだ」と宣言して終わる。僕らの学生運動時代は、みんなで相談した上で結論を出して、それを全員の考えとしていた。それに比べると明らかに世代が変わっています。今後も新しい運動がいっぱい起こるだろうという期待が持てます。

この間、京都で衆議院の補欠選挙があったでしょう。そのときに、SEALDs関西は「若者よ、投票に行こう」という運動を展開して1万数千枚ものフライヤーを配った。京都だけでなく大阪、神戸からもメンバーが行って、資金をかきあつめて作ったフライヤーを、「目の前で捨てられると、くじけるよね」と言いながらも、励まし合ってやっている。結局、投票率は戦後最低でした。それでもめげないで、次の参議院選挙に向かって若者が意思表示をしないといけない、いろんな大学の授業で「投票に行こうという訴えをさせてください」という働きかけをしている。ぼくの授業にも来てもらいました。よその大学へ行って、初対面に近い教員の授業に乗り込んで、知らない学生たちが100人もいる前で、「選挙に行きましょう」とフライヤーを配るって、勇気ある行動だと思います。

若い人たちに向かって、若いからダメだと言える状況はどんどん少なくなってきている。むしろ若い人が今の時代を切り拓く先頭に立ち、おじさん、おばさんが後ろからついていきながら、それを支える役割を果たす方向に変わってきているのではないのでしょうか。

長浜 今まで無関心だった人も多いと思うんですけど、戦争法や原発という自分たちに直接関わる問題に直面して、はじめて声をあげられたというのもあると思う。去年デモに参加したときに、そんな活動には絶対に参加しないだろうなと思っていた知り合いとデモ

の中で遭遇して、「お前もかよ」みたいになったんです（笑）無関心に見えても、頭の中ではもう少し深いところまで考えていたのではないかと思います。

## 想像力の問題

橋本 安保法制の話や原発の話が、将来、自分にどうかわってくるのかという、それを想像することって大事なんじゃないかと思っています。たとえば年金資産が大幅に減っているとと言われて、他人事のように聞いているけれど、このままではいざ自分たちが受給する世代になったときにもらえなくなるんじゃないか、とか。目の前の問題は自分自身にどう関係があるのだろうかというふうに考えてもらえたらいいと思います。

北島 消費税が増税されたら、物を買うときに払うお金が増えるからすぐに実感がわくけど、原発、戦争法となると、大きくて想像がつかないところもあります。

藤野 なんで学校で教えてくれへんかったのかな。縄文時代とかについてはあんなに丁寧に教えてくれたのに。それよりも、今の日本についてもっと教えてほしいかった。

神原 たしかに、誰かに教わることができないなら自分で何とかしないとイケない。それでも、自分が動けば少しずつでも分かることがあると思います。これから選挙にはじめて行く人たちも、まずはいろんな問題に興味を持つことからはじめてほしいのかなと、自分の経験から思っています。

橋本 すごく大事なことです。誰でも最初は何も知らないところから始まりますから。

## 若者の反撃は世界中で起こっている

石川 政治を変えられるかという問題について考えるときに、おもしろいと思うのは、アメリカの大統領選挙にバーニー・サンダースという候補者が出てきたことです。若者にこんなに奨学金の返済を負わせていいわけがないだろう、少数者がこんなに金儲けして、その他の大勢は貧乏なんて社会がいいわけないだろうって、きっぱりと言う。この主張が、若者の支持をすご



く集めています。韓国でもこの間選挙がありました  
が、今の政権に対する強い不満があって、与党はかな  
り追い詰められる結果になった。誰が追い詰めたかと  
言えば20代、30代の若者たち。投票率を上げて政治を  
変えるために、学生の運動と若い人たちの組合の運動  
が展開された。どちらの選挙にも共通しているのは貧  
困と格差を助長する政治に対するものすごいストレス  
です。それは日本社会も同じです。新自由主義といわ  
れる、競争の中で強いものが生き残り、弱いものが貧  
乏になるのは当たり前だというやり方で、ほんの一握  
りの人間が莫大な資産を得る一方で、「お金がなくて  
進学できなかった」「勉強がんばって卒業したけど奨  
学金の返済だらけだよ」「就職したけどブラック企業  
で給料15万円しかありません」という人がいっぱい  
いる。そんな社会をなんとかしたいんだという潜在的な  
エネルギーは、日本でもたくさんたまっていると思  
います。アメリカでも若い人が政治の前面に出てきて  
いるし、韓国でも同じようなことがおこっている。日本  
も現政権の政策には共通するところがある。若い人た  
ちの力を引き出すことができれば、大きい変化が短期  
間に生まれる可能性があると思います。

## 憲法を守る国へ

石川 9条を焦点に始められた今日の市民運動は個人  
の尊厳を守れと、運動の幅を広げています。立憲主義  
である以上、憲法の全条項を守らなければならない。  
つまり生存権を国が守るのは当たり前で、教育権を国  
が守るのが当たり前で、人間らしい労働条件を国が守  
るのは当たり前、そういう社会をつくれという方向に  
今の運動は発展せずにおれなくなっている。この局面  
で、若い人や若いママたち、昔から長く運動を続けて  
いた人たちが力を合わせて憲法の大切さについて語っ  
ている。戦後の政治史で初めてのことで、9条の枠  
をこえてこんなにみんなが憲法の重要性を語っている  
というのは。

橋本 人の命について考えるときに、個人の尊厳は一  
番大事にしなければならないところだと思う。もちろ  
ん平和に関する9条や生存権を保障する25条も大事で  
すけど、民医連はずっとそういう視点でたたかい続け  
てきたところなので、個人の尊厳を守れという運動は  
広がってほしいです。

長浜 今、格差が広がってきて、もう一度自分たちの

権利について見直したときに、憲法って大事だったん  
だなって気づく時代がきたのかなという印象を受けま  
すね。

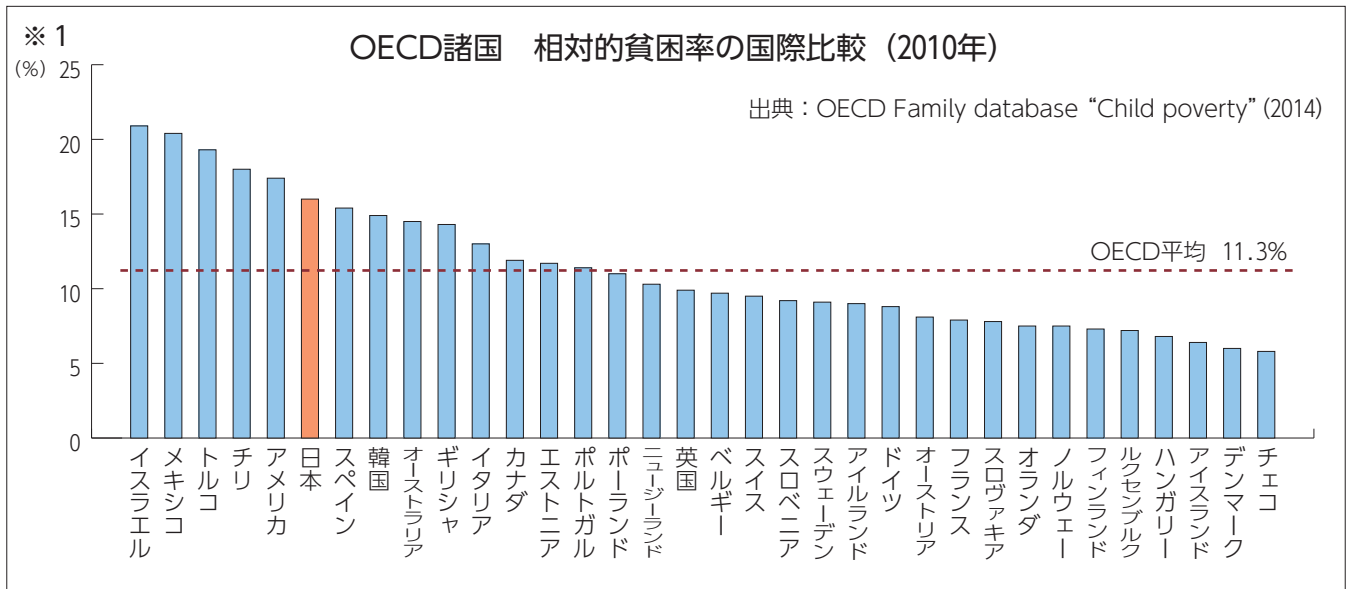
## 本当に「自己責任」なの？

石川 個人の尊厳に関連してもっと注目されるべきだ  
と思うのは、子どもの貧困です。昨年、政府の発表で  
全国の子どもの貧困率が16.3%（※1）だという数字  
が出てきました。日本の社会の平均的な生活水準の半  
分以下の所得で暮らしている子どもが6人に1人とい  
うことです。30人学級だったら、クラスに5人いると  
いう計算になります。平均的な生活水準の半分以下と  
いうのがどういう暮らしぶりになるかといえば、三食  
まともに食っているかが怪しくなるというレベルで  
す。学校の先生からときどき聞く話ですが、夏休みが  
明けると背は伸びているけど、痩せて登校してくる子  
がいる。それまでは朝晩貧しいものを食べていても、  
お昼の給食だけは腹一杯食べた。ところが、その給食  
が40日間食えずにやせてしまう。そういう子が全国に  
いるわけです。そんな子どもに自己責任だなんて言え  
るのでしょうか。子どもは親を選べないし、どこに生ま  
れてくるかも偶然です。そういう境遇にある子どもた  
ちを、果たしてそのままにしていっていいのか。ここ  
にもっと目を向けるべきだと思う。

「こども食堂」という新しい形の運動が広がってい  
ます。貧困状態にある子どもを食わせるのは行政の責  
任ですが、すぐには動きそうもない。じゃあ飯を食わ  
せてやろうという運動です。食材やカンパを集めて、  
たとえば町の端にある安い家を借りて「週2回だけ  
ど、タダだから晩飯を食いにおいで」といった具合で  
す。そういう現場を草の根でつくっているのです。

ある食堂では、子どもたちにうまいものを食わせて  
やろうと、カニの鍋をつくったことがあったそうで  
す。とても喜ぶにちがいないと思ったのに、誰も食  
べない。理由は、生まれて一度も食べたことがなかつ  
たからです。びっくりして「じゃあ卵焼きでもつくる  
ね」と言って立ち上がったたら、子どもはカニ鍋のた  
めに用意したポン酢をご飯にかけて、「おばちゃん、こ  
れでいいから」と茶漬けのようにして食べた。つまり  
日常的にそういう食べ方をしているということ。そ  
んな状況に置かれている子たちが、6人に1人の割  
合でわれわれのまわりにはいるのです。

子ども食堂は全国に広まっていますが、沖縄には  
300席の「こども食堂」もあるそうです。沖縄は日本



「相対的貧困率」は、可処分所得などをもとに全人口の中央値の半分（貧困ライン）未満の所得しかない人の割合を示す国際的な指標です。必要最低限の生活水準を維持するための所得がない貧困者が、国や地域の全人口に占める割合は「絶対的貧困率」と呼ばれます。日本政府は2009年に初めて相対的貧困率を発表しましたが、「子どもの貧困率」（2006年）は14.2%と、経済協力開発機構（OECD）諸国のなかでも最悪水準に位置するとして大問題になりました。その後も悪化を続け、昨年発表された最新数値（12年）で「子どもの貧困率」は16.3%へ悪化しています。

で一番、大人の貧困率が高い。それでも、大人は少しぐらい我慢しても子どもには腹一杯飯を食わせてやらなアカンだろう、という人たちの力で成り立っているのです。困っている子どもの家庭は少なからずシングルマザーの家庭です。お母さんは大変な苦勞をして働いているにもかかわらず、収入が少ないことが多い。だから、お母さんもしょにきて、シングルマザー同志交流しましょうという呼びかけもする。行政に何かを求めただけに止まらず、自分が直接運動に加わって、自分たちで助け合おうという運動が始まっている。このことは大きな希望だと思います。特に、子どもを守るということに関しては、どんな思想をもっている人でも関係なく協力し合えるでしょうから。

## 自分たちには何ができるのか

橋本 そういふ点では、共同組織の組合員さんたちの取り組みはすごいと思う。神戸医療生協の組合員さんも「こども食堂」をはじめています。地域で自ら動いている人たちが自分の働いているまわりに多くいるので、勉強になります。無保険の実態調査など、表に出てこない、見えない部分をどうするかみんな考えながら進めているので、学ぶべきところが多い。

神原 地域の人が温かいのはいいなと思いますね。「こども食堂」の話は初めて聞いたのですが、疎遠社会と言われる中でそういう思いやりをもった温かい人たちがいるということが、とてもうれしい。

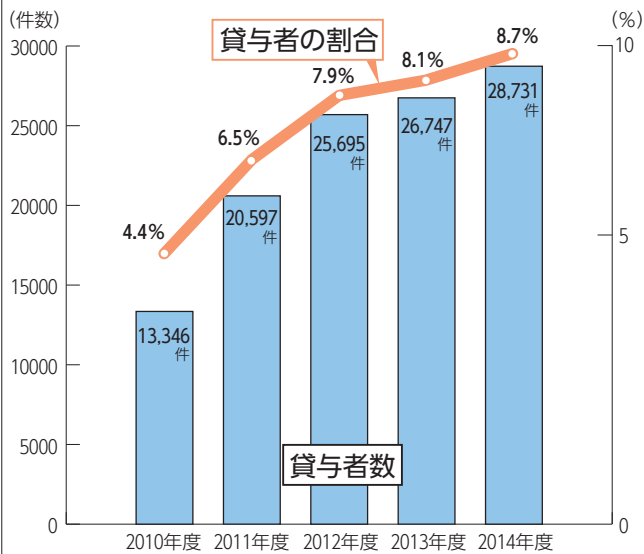
石川 沖縄の「こども食堂」がすごいという話をしました。「こども食堂」をやりはじめると、「自分たちがこれだけがんばってやっているんだから」という迫力が出てくる。行政はその子たちのために金を出さざるを得なくなってきます。沖縄県知事の翁長さんが、「辺野古に基地を移すことは人権侵害だ、差別だ」と怒っているじゃないですか。人間をみんな同じように大事にしよう、個人の尊厳を守ろう、という主張です。それと繋がる場所があって、今年の4月から沖縄県は30億円の予算をつけて子どもの貧困とたたかう取り組みをはじめている。調査をしてみたら、沖縄で学校に行けなくなっている子どもの最大の理由は貧困だということが明らかになった。不登校の問題を解決するためには、まず子どもの貧困を解消しなければダメだという話になっている。これは沖縄だけの話じゃなくて、日本全国で共通する話だろうと思います。

政府が子どもの貧困率について統計を出したときに、「クローズアップ現代」というNHKの番組が、あるシングルマザーの家庭にテレビカメラを入れた。不登校の男の子に「どうして不登校になったの？」と聞



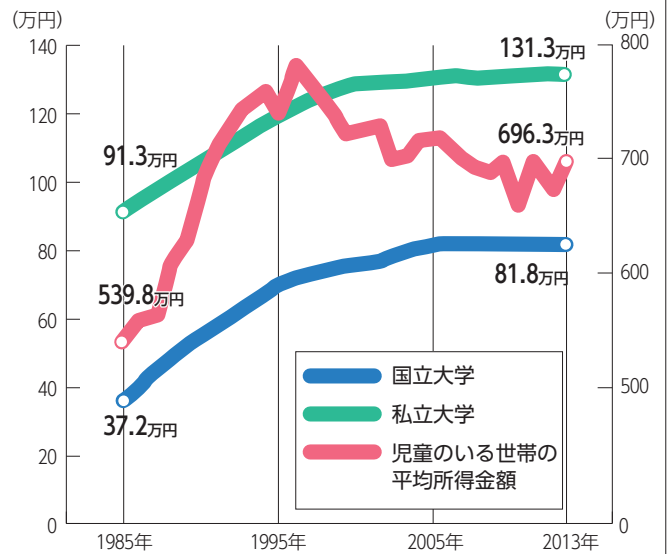
※ 2

(独)日本学生支援機構の貸与総額500万円以上の貸与者



出典：文部科学省提出資料より田村智子事務所作成

子どものいる家計の所得と四年制大学の初年度納入金



出典：国民生活基礎調査、文部科学省提出資料より田村智子事務所作成

いたら、その子はこう答えた。「いっしょに遊んでいた友だちがときどきファーストフード店に行く。お金があったら、みんなと同じように何か食べられた。でも、1回もお金を持っていたことがない。まわりのみんなはおいしそうに食べている。分けてくれることもあった。でも、そのときぼくはみじめだった」。みじめなんて子どもに言わせていい言葉ではありません。大人社会の責任です。それがきっかけで友だちと遊べなくなり、学校に行けなくなった。このままでは就職もあまり条件のいいところへは行けない。貧困の連鎖です。子どもがおこづかいを持っていなかったことの責任は、その子には一切ありません。そういう子たちの生活は国が守るのだと憲法は定めている。だけど実際はそれをしていない、その憤りを感じさせられた番組でした。授業で学生に見せたら、涙を浮かべて見ていました。大事なのは涙を浮かべさせることではなくて、だからどうしたらいいか、自分たちには何ができるのかということと一緒に考えることです。

社会はひどい状況だけど、同時に新しい変化の強い力がわいてきているというのが、今の局面の特徴です。40年間、政治にかかわってきたものとしての実感です。

## 貧困の連鎖を断ち切って

長浜 先ほども貧困の連鎖というお話が出ましたけども、どこかでそれを打ち切る手立てがないといけない。友だちが無料塾をやっている、たとえば塾で勉強

を教えた子がすごくよくできて、いい学校に入れるようになったとしても、エリートになってお金儲けしようとする子じゃなくて、その力をまわりの人たちが社会に還元できる子に育ててほしい、という話をしました。

石川 いま、国立大学でも初年度の納入金は80万を超えています。1人暮らしになれば生活費も大変です。家庭でお金が準備できなければ、奨学金に頼らざるを得ない。給付型がない今の仕組みのままでは、大学を卒業した瞬間に何百万円の借金を背負うことになる(※2)。学ぶ権利をちゃんと保障し、誰もが学べる仕組みをどうつくるのかを同時に考える必要があるでしょう。

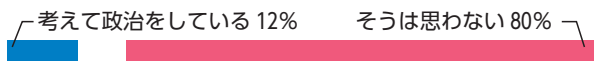
橋本 そう考えると、貧困と政治の果たす役割とは、切っても切れない関係ですね。一番分かりやすいのは、やはり選挙で直接1票を投じることだと思います。それだけで変わらなくても、医療の現場で問題を解決しながら、「こども食堂」のような取り組みや、政治的な行動、署名集め、デモに参加することなど、そういう草の根レベルの活動にかかわっていくことも大事だと思いますね。

## 社会を変える力を

石川 子どもだけでなく、お年寄りにもお金がないか

※ 3

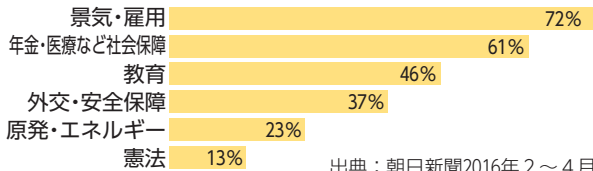
いまの日本の政治家は、若い人たちのことを考えて政治をしていると思いますか



憲法を改正する必要があると思いますか

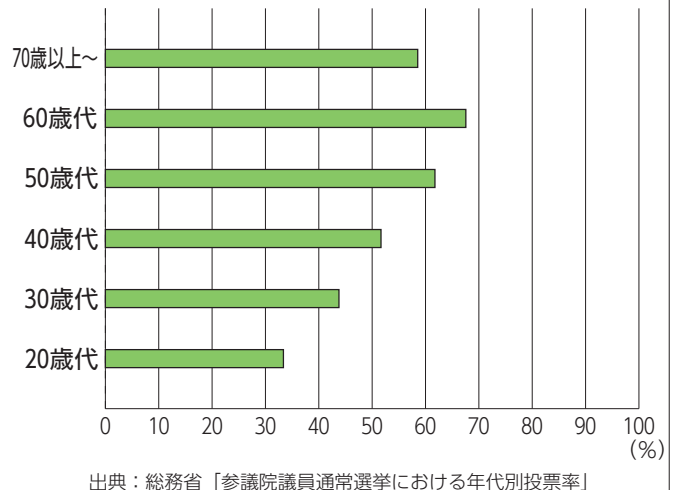


いまの政治で、力を入れてほしいと思うのはどれですか



出典：朝日新聞2016年2～4月調査  
(2016年7月1日現在18・19歳の3,000人対象)

平成25年参院選の年代別投票率



6月19日、選挙年齢を18歳以上に引き下げる改定公職選挙法が施行されました。国政選挙では、7月10日投票の参議院選挙で初めて適用されます。

新たに有権者となる18・19歳を対象とした世論調査では、「いまの日本の政治家が若い人たちのことを考えて政治をしているかどうか」という質問に「そうは思わない」と回答した人が80%と圧倒的でした。「いまの政治で力を入れてほしいこと」については「景気・雇用」72%、「年金・医療など社会保障」61%、「教育」46%といった回答が多数でした。

一方で、2013年に実施された参議院選挙の投票率は20代が33.7%、30代が43.78%と、他の世代に比べて低い数値になっています。若い世代の声を政治に反映させるためには、投票することが必要です。

ら人との付き合いができない人が多い。喫茶店へ行けばコーヒー代がかかるし、結婚式に出席するには何万円も必要になる。お金がないから人間関係がどんどん小さくなる。そういう問題が社会にはいっぱいある。これから、どうやって社会を変えていくか。

1つは、草の根の連帯で助け合いながら広く社会に訴える運動をするということ。

もう1つは、社会の仕組みについて学習すること。世界第三の経済大国と言われながら、子どもが飯を食べないってどういうことか。なぜそうなるのか、理由を知って広く社会に伝えることが必要です。

もう1つは、社会の仕組みを大きく転換するきっかけになるのはやはり選挙なので、どういう主張をしている人たちを国会に送るべきか考えること。

その3つぐらいのことをいつも同時並行で取り組む。忙しい生活の中でそれをしようと思ったら、すごく疲れるし大変だから、適当に遊びもはさみながらやりましょう。

この3年半、安倍政権になってから明らかに社会は悪くなっている。人が住みづらくなって、自由がなくなって、大学では軍事研究が奨励されるようになってい。今年の選挙はこの状況をなんとか転換しようと

「安倍政権を倒すために」という一点で野党がいっしょになった。戦後史上はじめてです。市民の運動のなかから野党に対して「お前たちどうにかして倒せよ、あの政権を」という声広がった。それが野党を動かして、野党共闘をつくらせている。主権者としての国民の急速な成熟が現れていると思う。

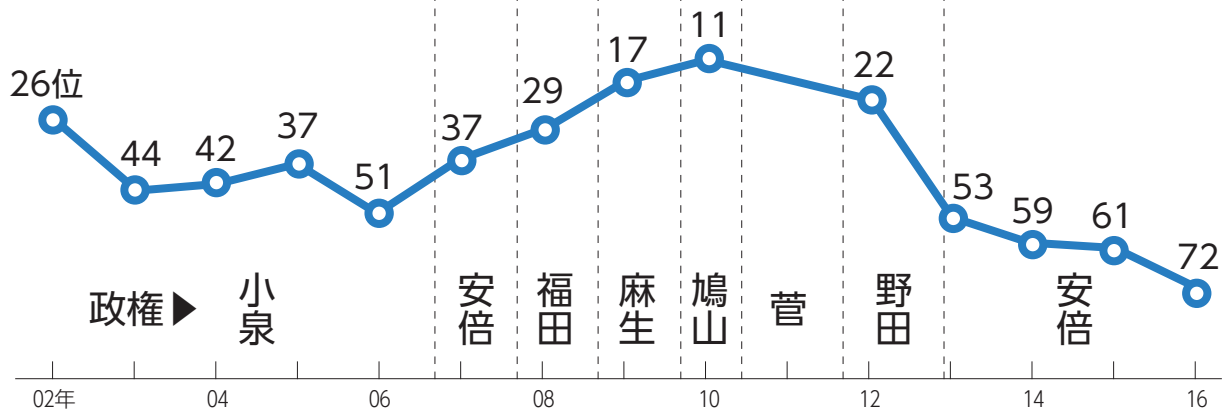
これでまた安倍政権が勝てば、暴走政治は加速します。僕はなんとかこれを食い止めたいと思っていて、止めるためにできる限りのことをしていこうと思っています。

## 自分で学ぶということ

石川 今年の夏、はじめて選挙権を得る18歳以上の人が240万人いる（※3）。その240万人が今の政権を支える側につくか、今の政権をなんとか変えようとする側につくかということが注目されている。選挙や政治の争点を、1つ1つ考えていくためには政治的な教養が必要です。学校で満身に教えることなく、現代政治について考えられない子どもを増やすような教育がずっと進められてきている。しかし、政治的な教養が自

※ 4

### 日本の「報道の自由度」ランキング



発表する月は一定しない 国際NGO「国境なき記者団」調べ

分に不足しているということに気付いたなら、それは自分で学ばないといけなんでしょうね。主要政党のホームページを見て何を訴えているかを確認して、もう一つ、この10年ぐらい何をしてきたかということ調べてみるといい。

例えば代表的な法律をつくるのに賛成した政党、反対した政党の一覧表があります。口先だけなのか、それとも実際に行動したのかということがそれでわかります。選挙のときにはみんないいことを言いますが、実績を確認することが大事です。

**藤野** 候補者のああしたい、こうしたい、という主張に賛同できたら投票するし、応援もしたいと思う。選挙というのはそういうものだと思うのに、候補者たちは得票のためにその場かぎりのアピールをしているような感じがします。

民医連の職員として患者さんの生活を見ていると、やはり今のままではいけないと思う。でも、どう変えていいのかがまだ分からない。もどかしさがあります。

## 独裁国家に奉仕する国民になっていい？

**石川** 教育は政治によってかなりコントロールされていますよ。教科書の内容もそうだし、教員の自由も縛られている。戦後、日本国憲法がつくられると同時に、教育基本法がつくられました。いくら憲法にいいことを書いても、実施できなければ絵に描いた餅に過

ぎないから、憲法を体現する人間を育てましょうというのが教育基本法の目的なんです。そこがねじ曲げられて、第一次安倍政権の2006年12月、国家に奉仕する人間を育てるという方向に法律を変えられた。

日本国憲法では個人が主人公で、国はそれを支える存在だと記されているのに、安倍自民党の発想はまったく逆です。国家に仕える国民を育てるため、国にたいてい文句を言わせないという圧力が強くかけられている。それについておかしいと思っている教員がいっぱいいるけど、その教員も手足を縛られて、思うような教育ができないという現状です。自民党は改憲案を出していますが、民主主義を否定するまさに独裁国家づくりの憲法です。その独裁国家に、国民誰もが自ら奉仕するのが美しい国だと言う。大日本帝国憲法と治安維持法をミックスしたような改憲案が自民党のホームページに載っています。時代錯誤も甚だしいけど、そういう人たちに今、政権を任せているというのが実情です。

今回、熊本地震のときも「こういうことがあるから緊急事態条項を憲法に盛り込まなければならない」と言いました。評判が悪くなかったのですが、すぐに引込みましたが。たとえば戦争のとき、大きな災害があったとき、国民が「内乱」を起こした時に、総理大臣が「国家緊急事態です」と宣言する。その宣言がどういう効力を発するかというと、国会を通さずに、大臣だけで法律が決められるようになる。今の20人ほどの大臣だけで法律が全部決められる。だから「明日から労働組合は禁止しましょう」と言われたらすぐに禁止になる。国会を通す必要がないということは、われわれが選挙で選んだ議員の意見は一切聞かずに、現政権の



人間が何から何まで決めてしまえるということです。「協同組合は禁止にしましょう」となると医療生協はなくなります。いくらでも勝手に決められる。一度、緊急事態宣言を発するとどれぐらいの期間効力があるかと言えば、期間に定めはないのです。自民党の改憲案の98条と99条にはっきり書いてあります。その深刻さに気付いた人が運動を急いで進めています。

今の日本社会は戦後史上、最大の分岐点に立っています。この間も国連から「あなたの国は報道の自由ランキングで世界72位です」と言われてしまった（※4）。本当のことを国民に何も伝えていないでしょうと言われた。この道をますます転落していくのか、危機を乗り越える主権者が育って、憲法どおりの国づくりへ転換するのか、その分かれ道です。

## 自由な心を大切に

——最後に新入職員のみなさんにお聞きします。自分が社会をよくしていきたい、暮らしやすい社会にしていきたい。そのためにはどうすればいいと思いますか。

**北島** 今の世の中がどうなっているのか、まずまわりの人に伝えるということ。それを通して、自分自身も考えを深めていかなければいけないと思う。賛同の意見も反対の意見も出てくるでしょうが、相手の意見を理解しようとする気持ちも大事だと思います。

**神原** 自ら情報を発信するということを重視してい

たいと思う。自分のことを知っている人であれば、ぼくの話だからと聞いてくれて、それが政治や社会について考えるきっかけになるかもしれない。いずれは協力して立ち向かっていけたらいいと思います。まずは知ってもらいたい。

**藤野** 民医連に加盟している医療機関や事業所がたくさんあるし、仲間もたくさんいるので、まずはその人たちと団結することが重要だと思います。同世代の人たちとわたしたちで時代をつくっていかないと。そこではじめて、まったく選挙に興味がないという人にも届く、大きな声になるんじゃないかなと思います。まずは興味のある人や同じ職場で働いている人とタッグを組んで、友だちや知らない人へとどんどん話を広げて行けたらと思います。

**石川** 民医連には民医連としてのモノの考え方が当然あると思う。同時に、若いみなさんにはこれまでの民医連はこうであったかもしれないが、これからはこうあるべきではないかと、これまでの到達点をどう乗り越えていくかという角度から受け止めることも大事です。組織から離れた個人としての「わたし」というのは、みんなちがうじゃないですか。民医連という職場の方針に「わたし」を閉じ込めるのではなくて、思うこと、考えることを自由に発信しながら、広い共同のなかで手をつないでいく。その両面ですよ。自分の自由な発信、自由な着想というのを大事に育てながら、がんばって欲しいと思います。

——どうもありがとうございました。